

ベケット研究会第51回例会 発表要旨

2018年7月14日（土）
西宮市大学交流センター

神経症のパークリー：『フィルム』における生と死の葛藤

菊池慶子

『フィルム』においてOを知覚するEのカメラアイと他者の知覚から逃げるOが対峙する最後の場面は、これまでの研究の中でしばしば人間の自意識の問題として論じられてきた。しかし、この場面はむしろ彼らの動物的な反射や本能を表すものではないか。本発表では主にフロイトの精神分析理論とクレッチマーによる擬死反射の研究を参照し、OとEのドラマを人間性と動物性の両側面から考察する。これらの考察を通して、『フィルム』において「知覚すること」と「知覚されること」が一義的ではなく多様な意味を持つことを、さらに最後の場面がいかなる意味で動物的・本能的であると言えるのかを示したい。

上位の視点の不在：『……雲のように……』における「見えるもの」の形態

藤原 曜

「それは残酷な眼だ」。サミュエル・ベケットは自身のテレビ作品についてこのように語ったが、例えば、晩年の『……雲のように……』や『夜と夢』といった作品では、対象を執拗に追い詰める視線は不在であり、視覚の問題は、「残酷な眼」とは異なる次元で扱われていると考えられる。

本発表では、『……雲のように……』を対象に、まず映像の配列（セリーにおける規則性と逸脱）を検討する。次に、想起する主体と想起される対象との関係を、人物の姿勢によって喚起される紋中紋、光と闇の配分、視点、溶暗によるカット繋ぎ、という4つの点に注目することで考察し、この作品がその「見えるもの」の形態において二元論を乗り越えており、そこに「いかなる中心にも特権を残しておかないような脱中心化」が認められることを明らかにする。